

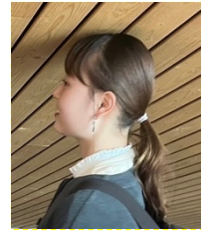
没入とセレンディピティ

ー田園都市住民のためのラーニングコモンズー

Keywords

リノベーション 地域コミュニティ 少子高齢化
図書館の複合施設化 ベッドタウン 第2の人生

DZ20022 平井 里奈



1. はじめに

神奈川県川崎市宮前区にある宮前区役所と市民館図書館は2027年~28年に移転予定である。使われなくなる予定のこの建物を地域の人々の第3の居場所となるラーニングコモンズに改修することを提案する。

2. 研究の背景と目的

2.1 私と宮前図書館

中学生の頃から近所の図書館に通っていた。といっても本を借りるためではなく勉強をするためである。「将来建築家になったらこの建物を設計しよう」と思っていたが、2019年、私が建築家になる前に併設している市民館や同じ敷地内にある区役所と一緒に移転することが決まった。

移転が決定した2019年以降、私は3期にわたり新しい市民館・図書館と現在の用地活用を考えるワークショップに参加しており、中学生からリタイア世代まで幅広い年齢層の意見に触れてきた。この経験を通じて自分自身や他の区民が公共施設に何を求めているかを理解できた。

現用地の活用方針は未定であるが、今までこの場所の図書館に通っていた一ユーザーとして今後の活用方法を提案する。

2.2 敷地について



図1 敷地平面図

宮前区役所と市民館・図書館はそれぞれ独立したボリュームで構成されている、間にある中庭からはこの2つのボリュームによって周辺の住宅地を切り取られ、空が広く見える。このボリューム感を引き継いだリノベーションによって新しい施設を設計する。

2.3 行き場のない田園都市住民

神奈川県川崎市宮前区に住んでいる人の多くは東京都や横浜市へ通勤・通学しており、小学校から区外の学校に通う子どももいる。つまり子供から大人まで多くの区民が区外で1日の大半を過ごしている。また、区内に大規模な商業施設などがいないため週末も近隣の街(横浜、東京)へ出かける。カフェなどのサードプレイスも少なく、自分の家から徒歩圏内の区内には居場所がない。

現在宮前区の中で最も人口の多い世代は40代~50代である。このまま高齢化が進むとリタイア世代が人口の多くを占めることになる。しかし今まで区外で仕事をし、区外で余暇の時間も過ごしてきた人たちは第二の人生においてどこに居場所を見出すのだろうか。

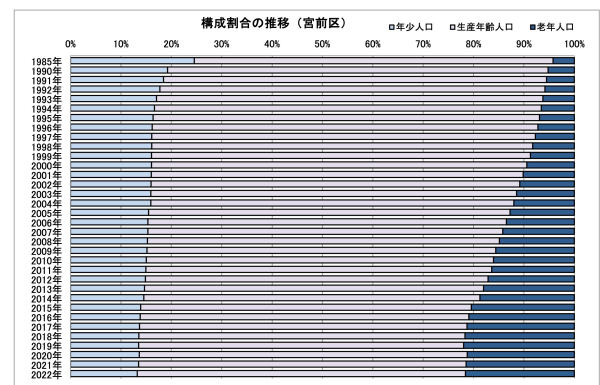


表1 宮前区民の人口構成割合の推移

2.4 移転計画について

川崎市立宮前図書館、市民館、宮前区役所(以下:現用地)は2027年に現在の場所から隣の鷺沼駅前に計画されている複合商業施設内に移転する。

複合施設内に移転することで利便性が向上する一方、図書館に求められる静けさや、芸術を鑑賞した後の感動、その場所で出会った人々から受ける刺激の余韻が失われてしまうのではないかと考えた。また、利用率が増えるからこそ一人一人にとって居心地の良い場所がなくなってしまうのではないかと危惧している。

3. プログラム

様々な世代が家以外の居場所として過ごすことができ、区民同士が様々な距離感で関わることのできるラーニングコモンズを提案する。

中高生が友達と勉強したり、社会人がスキルアップのため、またリタイア世代が趣味として各々の学びを深めるほか、自分の持っているスキルを社会活動に生かす「プロボノ」や市民サークル活動を行う場を融合し、区民同士の関わり合いにもバリエーションを持たせた施設とする。

4. 設計手法

4.1 没入とセレンディピティ

学びという行為においては自分自身と向き合うことと、他者と向き合うことの両方が必要である。この2つの行為を「没入感」と「セレンディピティ」という感覚で表す。

没入感はいわゆる「ゾーンに入る」という感覚であり、周囲の環境が気にならない、自分の世界に入り込んでいる状態のことである。セレンディピティは素敵な偶然に出会ったり、予想外のものを発見すること、また何かを探している時に探しているものとは別のことを偶然見つけることであり、「出会い」の感覚である。

このラーニングコモンズでは「没入感」を誘発し自分自身と向き合うことのできる空間と、「セレンディピティ」を引き起こして他の市民と時間や空間を共有できる空間の2つを設け、利用者それぞれに合った学習と居場所を提供する。

その形態について、ヨーロッパの図書館などにみられる背の高い本棚や近年の図書館の特徴である話してもいいザワザワ空間など、視覚的・聴覚的に情報を溢れさせることで没入感をもたらす空間が生まれているのではないかと考えた。



写真1
背の高い本棚に囲まれた空間
(フランス国立図書館
リュシュリュール館)

4.2 活かすものと改善するもの

現敷地の中では「中庭での中高生のダンス練習」、「市民館ホワイエのコミュニティカフェ」といったように市民のアクティビティが溢れ出す場面が存在する。これらは改修後も継続できるようにする。一方で採光に配慮がなく全体的に暗い空間構成、階層ごとのつながりが無い断面は改善する。

4.4 ダイアグラム

①構造的に分離している区役所棟と市民館・図書館棟をそれぞれ動の建物と静の建物に分ける。

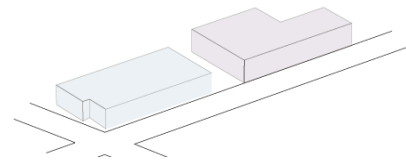


図2 ダイアグラム①

②敷地へ入る動線軸を「セレンディピティのコリドー」とし、2つの建物を繋ぐ。

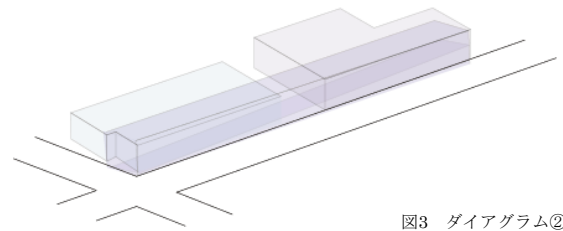


図3 ダイアグラム②

コリドーは軸に沿って進んでいくが、梁に合わせてランダムに床を抜くことで上下階のアクティビティを可視化し、音楽やダンス、会話の様子を伝えて訪れた人々をそれぞれの行きたい場所へと誘う。

③市民館ホールは4層の吹き抜けであり、この大空間を没入のハコとする。

ハコの中にらせんスロープを増築し、本棚に囲まれているかのようなボリューム感、人々の足音や物音に囲まれた没入空間を実現する。

以上の操作により自分の世界に入り込む没入感と、他者との関わり合いであるセレンディピティの両方をもたらす空間をつくる。

6. おわりに

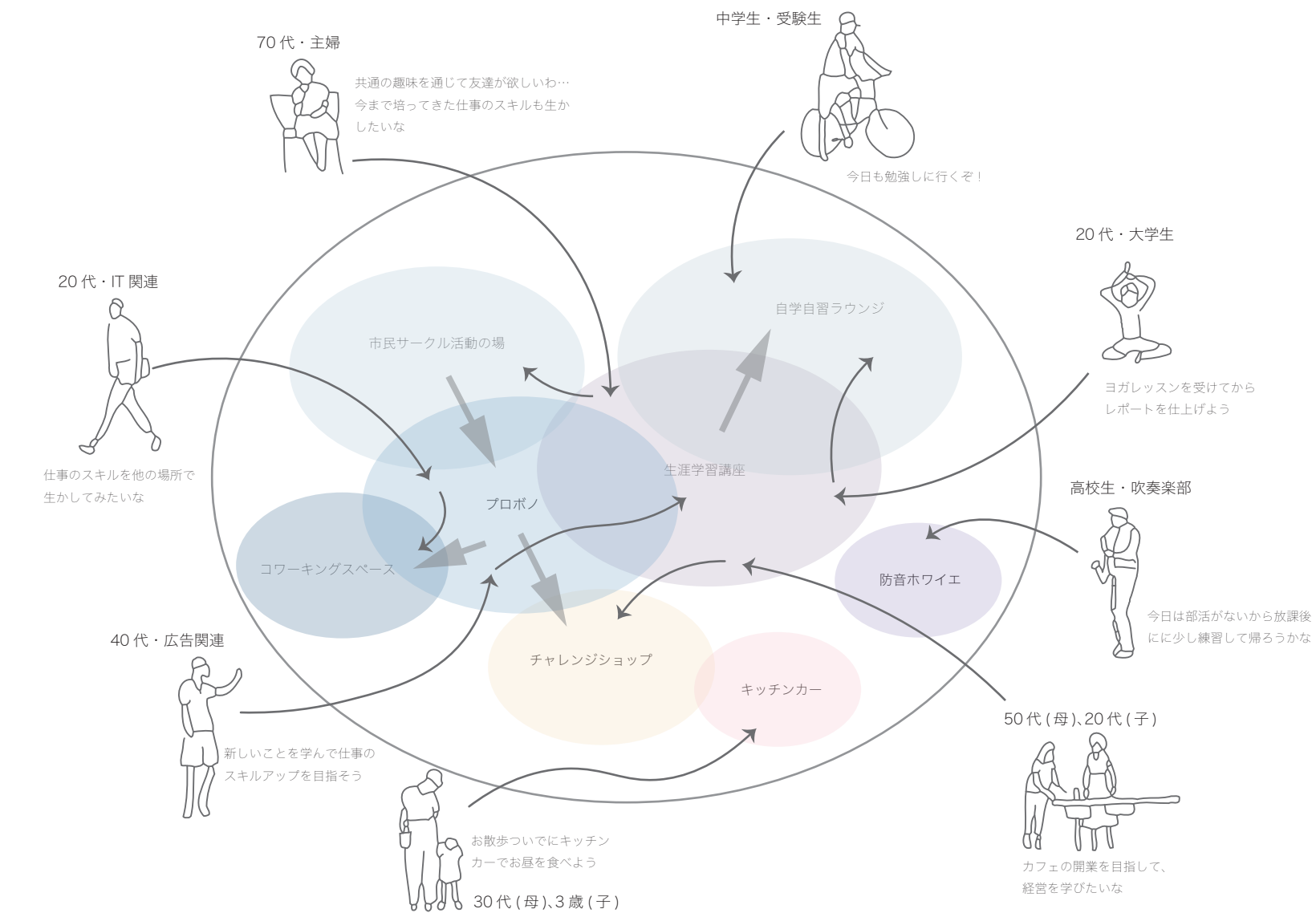
今まで宮前区内で居場所を見出せなかった住民たちがこの建物内で出会いを広げることで、地域コミュニティの造成、家や仕事場以外の居場所の確保につながる。また、プロボノや生涯学習など、新たなコミュニティに参加するきっかけを作ること、ハード面だけでない居場所作りを実現する。

参考文献

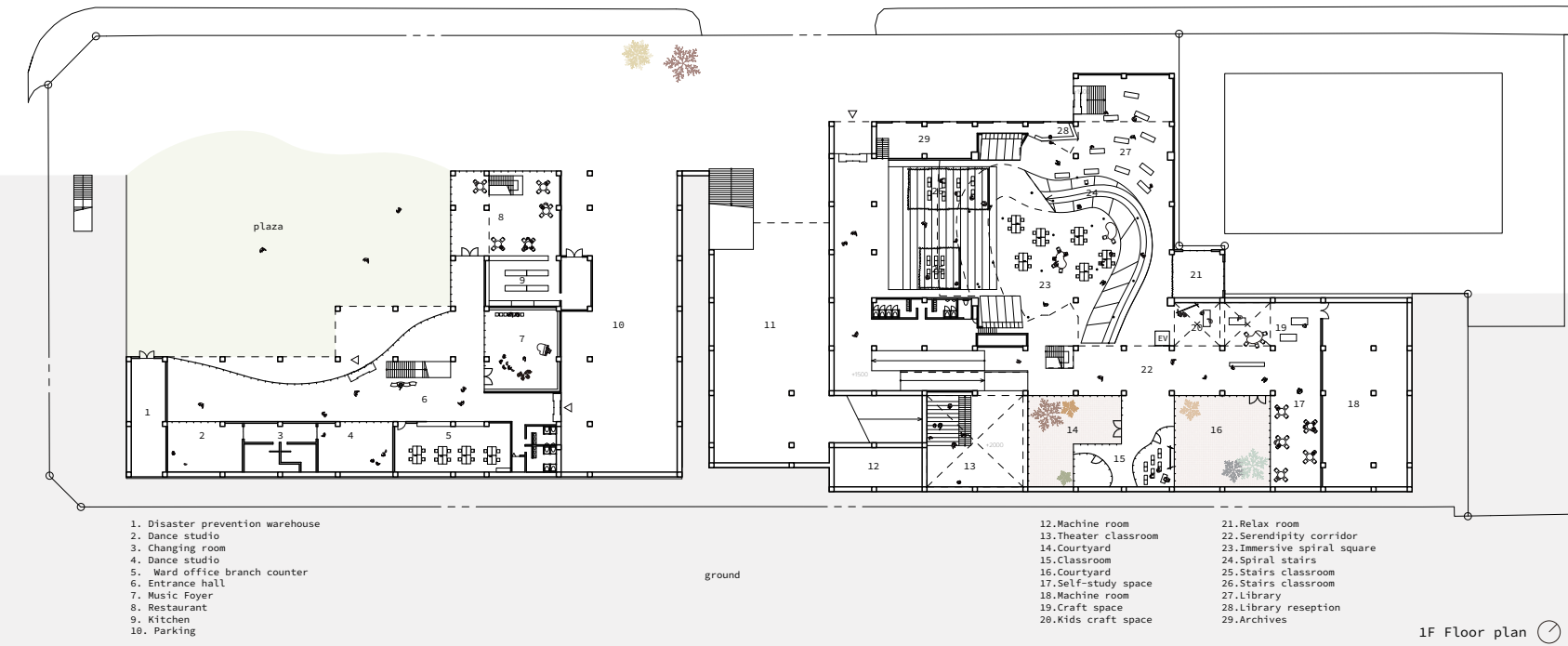
1) 国勢調査 2020年 総務省

■ プログラムー公共に開かれたラーニングcommons

様々な世代が家以外の居場所として過ごすことができ、区民同士が様々な距離感で関わることのできるラーニングcommonsを提案する。中高生が友達と、社会人がスキルアップのために、リタイア世代が趣味として各々の学びを深めるほか、自分の持っているスキルを社会活動に生かす「プロボノ」や市民サークル活動を行う場を融合し、区民同士の関わり合いにもバリエーションを持たせた施設とする。



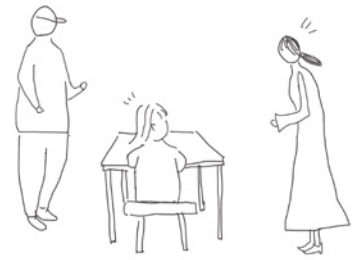
■ 平面図(1F)



■ 没入とセレンディピティ



没入感「ゾーンに入る」という感覚であり、周囲の環境が気にならない、自分の世界に入り込んでいる状態である。



セレンディピティは素敵な偶然に出会ったり、予想外のことを発見すること。また、何かを探している時に探しているものとは別のことを偶然見つけることであり、「出会い」の感覚である。



1人の世界に没入し、その後他の人のアクティビティに出会うこと、様々な人が思い思いに過ごす様子に触れたあと、自分なりの過ごし方で1人の世界に入り込むというように、没入とセレンディピティはお互いに必要な機能である。

■ 模型写真

